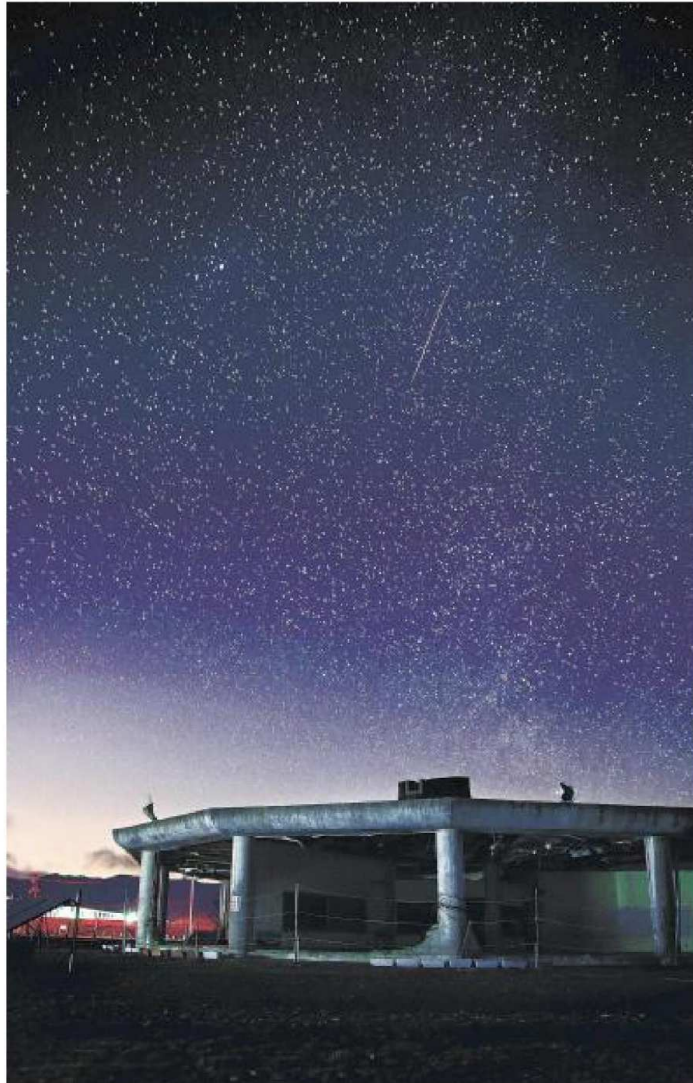


<大川小事故> 「助けられなくてごめん」 星空の静寂に命思う



子どもたちの歓声が消えた校舎。あの日の夜のように満天の星がきらめいていた＝2017年12月13日午後10時40分、石巻市釜谷の大川小

宮城県石巻市の今野浩行さん（55）、ひとみさん（47）夫妻は今年も大川小で年を越した。「助けられなくてごめん」。祭壇に静かに手を合わせ、語り掛ける。

東日本大震災の津波で6年だった長男大輔君＝当時（12）＝を失った。自宅で大輔君の帰りを待っていた父浩さん＝同（77）＝、母かつ子さん＝同（70）＝、長女麻里さん＝同（18）＝、次女理加さん＝同（16）＝も帰らぬ人となった。

「葬式を出したら『自殺すっぺ』と思っていた」（浩行さん）。大川小津波訴訟の原告団長を任され、真実を明らかにしたい一心で踏みとどまった。2016年10月に勝訴したが、被告の石巻市と宮城県が控訴。仙台高裁判決が今春にも出る。

あの日も満天の星が夜空を照らしていた。震災後、今野さん夫妻にとって、元朝参りの習慣は大川小詣でに取って代わった。



津波で壊れた大川小の掛け時計。午後3時37分で止まっている＝2011年3月29日



祭壇に手を合わせる今野さん夫妻。震災後、大川小での年越しが慣例になった＝1日午前0時

<大川小> 宮城県石巻市釜谷地区に立つ大川小は、太平洋の追波湾に注ぐ東北最長の北上川（延長249キロ）の下流域にあり、河口から約3.7キロ離れている。

北上川は東北で最も勾配が緩く、河口から上流約80キロまでの高低差は十数メートルしかない。津波は上流約49キロまで遡上（そじょう）しており、専門家は「津波が上りやすい川」と指摘する。

震災当時、釜谷地区には141世帯あった。山あいにある入釜谷地区を除く釜谷地区の全114世帯が津波で流失し、小学校周辺は壊滅的な被害を受けた。

大川小は、1873（明治6）年に開校した釜谷小が前身。1901年、大川尋常高等小が現在地の釜谷山根に整備され、名称を変えながら現在に至る。震災後、二俣小敷地内に仮設校舎を建てたが、今春、二俣小と統合し、145年の歴史に幕を下ろす。